馬耳東風

昨夏，14年間一緒に暮らした愛犬を亡くした．彼は私がメキシコに単身赴任していた時の職場に他の1頭と一緒に迷い込んで来た犬である．人なつっこいので放置犬であることは明らかだった．2頭ともガリガリに痩せて腹を空かせていたので，弁当の一部を与えたがそれで満足するはずもなく，急遽ドッグフードを買ってきてもらって与えた．1頭はそのうちいなくなったが彼はいつまでも去ろうとせずうろうろしていた．痩せ細り，体表には漆喰をつけられてみすぼらしい格好になっていたが，顔かたち，大きさ，毛色等，私が赴任する年に死んだ犬にそっくりだった．私は，その亡き愛犬がはるばる太平洋を泳いでやっと私の元に辿り着いたかのような錯覚を覚え，もし帰宅時までそのあたりにいれば飼おうと思った．彼との生活は，昼間与えたドッグフードを帰宅の車の中で嘔吐した後始末をすることで始まったが，3日にあげず嘔吐と下痢を繰り返した．臨床経験はなかったが，放置犬だったのでとりあえず駆虫薬を与えたところ，これが大当たりで大量の条虫が出て，以後嘔吐と下痢はピタリと治まった．

当初は私が出勤してひとりになると，また捨てられたと思うのかロープをかみ切って度々脱走した．幸い私が住んでいた住宅地は刑務所のような高い塀に囲まれ，小銃を持った警備員が二人一組ジープで巡回しているような環境だったのでいつも警備員に保護され，彼等の事務所の横にある収容施設に入れられていた．しかし引き取りの度に保護代金として数千円払わなければならず，その都度テキーラの瓶が目に浮かんだものである．

メキシコは狂犬病の常在国である．連れて帰る準備（個体識別チップの埋め込み，狂犬病ワクチン接種と抗体検査，観察期間等）に1年近くを要したが，2006年暮れに無事帰国できた．道中20時間近く，一切排泄せず動物検疫所でも我慢していたが，成田空港の駐車場に出た途端，わが家の国産車の近くにあったBMWの車輪に向かって約2分間放尿してしまった．申し訳ないと思いつつも，車に向かって頭を下げてそのまま帰宅した．

私の心の中では彼は，その前に飼っていた犬の生まれ変わりなので，約25年間一緒に過ごした犬を失ったことになる．遺骨の大部分はいつも昼寝をしていた庭の木の下に埋めたが，一部を壺に納めて手作りの祭壇に置き毎朝お線香をあげている．しかし8カ月たった今も心の空白が埋められないでいる．

先日新聞で「ペットも家族の一員，同じお墓に入りたいけれど」という記事があり，飼っていた犬や猫と同じお墓で眠りたいという人が増えているとのことであった．しかし人間と動物が共に入れる墓地はまだ一般的ではなく，50年以上前から共にはいることを認めている東京都のあるお寺には，「霊園やお寺に断られた」という相談が各地から寄せられているそうである．こうした状況に対応すべく浄土宗では，今年2月には増上寺で「ペットは往生できるのか」という公開講座が開かれ，200人以上の僧侶が集まって議論がなされたそうだ．「同じお墓に入っていいのか」という質問には問題ないとの答えだったという．

しかし私の死後，子供達が私の気持ちを「忖度して」愛犬の遺骨を私と同じお墓に入れることのないよう言っておくつもりでいる．確かに私の気持としては一緒に入れて欲しいのはヤマヤマであるが，折角ひとりでのんびりしているのに，またわがままなご主人様と一緒にされるとくつろげないのではないか，それは可哀想だと考えるからである．（久）